

聖書：マタイ 10：16～25

説教題：弟子は師のように

日時：2019年3月24日（朝拝）

イエス様は10章冒頭で12使徒を選び、その彼らを初めて宣教旅行に遣わす際に語った言葉が今見ている10章です。前回は5～15節を見ましたので今日はその続きです。イエス様の弟子として、イエス様とともに神の国の福音を宣べ伝えることは大いなる特権です。しかし素晴らしいことばかりが待っているわけではない。むしろ行く手には多くの困難が予想される。いやただの困難ではなく迫害がある。そのことをイエス様は予告して弟子たちに準備をさせようとするのがこの箇所です。

まずイエス様は16節で「いいですか」と言って、こう言われました。「わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。」羊は弱い存在、無力な動物として取り上げられています。その羊はいつ狼に襲い掛かれ、食い千切られ、命を落とすことになるか分かりません。そのような非常に危険な中に弟子たちは送り込まれます。「ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい」とイエス様は言われます。蛇と言って私たちが思い起こすのはエデンの園でエバを誘惑したあの蛇かもしれません。あそこにも蛇は野の生き物のうちでほかのどれよりも賢かったと書かれています。しかしあの蛇のようにずる賢くあれ！ということではありません。次に「鳩のように素直でありなさい」とも言われています。「素直」と訳されている言葉は「混じり気がない」という意味で、純粹、無邪気、素朴といった意味合いを持っています。この二つの側面を併せ持つようにとされているわけです。賢くあるけれども素直な人。あらゆることをよく考えて注意深く判断する人であると同時に、神への信頼から来る純粋さ、単純さ、子供のような素直さを持つ人であるようにと。

では弟子たちのこれからの生活には具体的にどんな危険が待っているのでしょうか。まず地方法院に引き渡されるとあります（欄外17―「サンヘドリン」の複数形）。イエス様に従って神の国の福音を伝えていると、そういうところに引っ張って行かれ、裁判にかけられる。また会堂でむちで打たれる。さらには総督たちや王たちの前に引き出される。こちらはローマ総督やヘロデ王のことが考えられているのでしょうか。つまりユダヤの宗教裁判にかけられるばかりか政治犯として捕らえられ、国家的裁判にかけられる。なぜこんなことになるのでしょうか。それは「わたしのために」だと18節にあ

ります。イエス様のためです。イエス様の弟子であることをやめれば人々からの迫害はなくなります。しかしイエス様の弟子として歩む限り、この扱いは避けられない。イエス様はそのように語っています。

しかしイエス様はそのただ中で与えられる神の助けについても語られました。地方法院や、総督、王たちの前に連れて行かれることは怖いことです。しかしそれは何のためでしょう。18節後半に「彼らと異邦人に証しをすることになります」とあります。これが目的です。なぜ弟子たちは権力者たちの前に引っ張って行かれるのか。それは人々に証しするためである、と。その目的のもとに神がすべてを導いておられる。たまたま運悪く、そこにしょっぴかれて行くのではないのです。そこは人々に証しさせるために神が整え、用意された舞台なのです。

しかしそこで果たして証しなんかできるだろうかと私たちは恐れるものです。そんな私たちに 19～20 節は心配無用であると語ります。話すことはその時与えられる。あなたがたのうちにおられる神の御霊が話させてくださる。だから前もって心配する必要はないと。私たちはもちろん、この約束を盾にとって、神を試すようなことをしてはなりません。私が思い起こす一つのことは神学生時代の説教演習の時のことです。クラスメートの一人が原稿を持たないで説教壇に立ちました。さすがやるな～、全部暗記したのか、それとも原稿に縛られない説教をしようとしているのか。皆が固唾を飲んで見守りました。スタートはまだ良かったのですが、間もなく言葉が自由に出て来ない。本人も予想外の展開なのか顔に動揺の色がありあり。内容は支離滅裂となり、迷走し始め、語っている人も聞いている方も恐ろしい時間となりました。演習が終わった後、担当教官の怒りに満ちた厳しい講評の一言が忘れられません。そんなことを実際の教会でやったら一発で首になると思え！と。また前任地で奉仕していた時、中会で伝道支援礼拝が持たれました。説教の前に一人の姉妹が証しをするために前に出て来て開口一番、聖書に話すべきことはその時に与えられると書いてあるから、私は特に準備せずにここに立っています。話させてくださる聖霊に期待しています、と切り出して始めました。しかし本当に準備していなかったらしく、あらららら・・・という状態。会場から、「○○ちゃん、がんばれ！」と声がかかるも、話はしどろもどろ。何を話したいのか、いつまでそこに立っているつもりなのか。かなり気まずい雰囲気となりました。何が問題なのでしょう。ペテロの手紙第一 3 章 15 節：「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしないでください。」 話すための準備

備は必要です。牧師も準備せずに、後は聖霊が語らせてくださるなどと都合よくここを解釈してはならない。今日の御言葉は、準備したくてもそれができない人への約束です。突然、ローマ総督や王たちの前に引き出されて、もちろん原稿もないし、頭の中でゆっくり整理する時間もない。それではもう終わりなのか。いや大丈夫。聖霊が内にいて語るべき言葉を教えてくれる。そのことを信じて、より頼むように、ということです。その実例を私たちは使徒の働き 4 章や 5 章に見ることができます。突然捕らえられたペテロやヨハネがサンヘドリンの前で立派な証しをします。そのような話は歴史の中にもありますし、私たち一人一人にも当てはまります。思わぬ状況に投げ込まれた時、私たちが思い起こすべきは、私は一人ではないということです。聖霊がともにいて語るべき言葉を教えて、守ってくださる。

この慰めの言葉の後、もう一度、厳しいことが 21 節で語られます。イエス様に従っていると家族からも迫害を受ける。最も大事な人間関係にも分裂が生じ、最悪のケースとしては死に至らせられる。22 節には「すべての人に憎まれる」ともあります。さて私たちはどうするでしょう。こんな悲しい経験をしてまでもキリスト教信仰を保つべきなのだろうかと思う時もあるでしょう。しかし聖書は、家族関係あるいは地域との付き合いの関係を失っては大変だから、そういう状況では信仰を後ろに引っ込めることもやむを得ないとは言いません。ここでもはっきりと「しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます」とあります。やはり第一のものを第一にするという優先順位を間違えてはならない。仮にそれまでの人間関係を全部失うように思うことがあっても、一番大事にすべきことを一番にしていく。そして後のことはすべてをご存知のお方にお委ねする。そうするならどうして神は、ご自身に信頼して従う者たちを究極的な意味でがっかりさせる結果に導かれるでしょうか。まさにここにおいて鳩のような純粋で素直な信仰が必要とされます。と同時に、その困難の中でも蛇のように賢くあるべきことが 23 節です。ある地域で迫害されたからと言って、いつまでもそこにとどまる方が良いとは限りません。意地を張って、無駄に粘って、命を落とすより、他の町へ移って新しい宣教に仕える方が良い。人の子が来るまでに伝えるべきところは多くあります。悲しみの中でも、このような真の賢さを持って行動すべきことが言われています。

最後の 24~25 節は、迫害や苦しみの問題を考える上で大切な視点をもう一度私たちに教えてくれる言葉です。ポイントは師と弟子の関係です。私たちは苦しみに会うと、自分の苦しみばかりに目をやりがちです。しかしまず私たちの師の姿を見るべきである。

24 節の意味は何でしょうか。それは弟子が師よりも良い待遇を期待することはできないということです。師が迫害されているのに、弟子が安楽椅子に座って眺めているだけと
いったより勝る状態にあることはできない。でもなぜイエス様は人々から迫害される
のでしょうか。何か悪いことをしたからでしょうか。聖書が語るのは逆です。イエス様が
正しかったので、この世はイエス様を憎んだ。ヨハネの福音書 3 章 19 節：「光が世に
来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛した」。ここでの光とは
イエス様のことです。私たちはある程度の光は必要としていますが、すべてを明らかに
する光では都合が悪い。誰にも知られたくないこと、自分でも気づかなかった醜い面が
照らし出され、暴かれる。まことの光であるイエス様の前にいると自分の罪が頭にされ、
落ち着かなくなる。また来たるべきさばきを思って、どうにかしなければならなくなる。
こういうことは自分の罪を認めたくない人間、プライドの高い人間にとっては嫌なこと
なのです。だからイエス様を拒絶する。邪魔な光は消してしまえ！と迫害する。

しかしもう一つ考えに入れるべきことがあります。それはなぜイエス様は人々からの
迫害や反対活動を、そのままにしておかれるのかということです。むしろ罪ある人間ど
もをさばき、ご自身の正義を力強く高く掲げれば良いのではないか。理不尽な状態を放
置せず、正しい状態にすることこそ真の先生がすべきことでないか。しかしイエス様が
そうされなかったのは、一言で言えば私たちの救いのためです。もしイエス様が悪を即
刻さばき、滅ぼすなら、罪人である私たちは誰一人救われないことになります。皆さば
かれて終わりです。しかしイエス様がこの世に来たのは、私たちの罪を背負って代わり
に苦しみを受け、信じる者たちを救い出すためでした。ですからイエス様が人々から受
ける迫害は不当なものではありますが、イエス様は甘んじてそれを受けておられるの
です。そしてその行き着くところがあの十字架上の死です。ですから私たちはイエス様の
弟子となることによって、そうでなければ関わらなくて済む苦みを背負わされるわけ
ではないのです。イエス様が受けられた苦しみは本来私たちが受けるべき苦しみです。
それを私たちの先生が率先して担ってくださる。私たちを救い出すために。そして
ついにはご自身の尊い命までささげようとしておられる。なのにどうしてそのイエス様
を見て、世の人と一緒にさげすむべきでしょうか。あれとはできれば関わりたく
ないと眉をひそめるべきでしょうか。そこにいらっしゃるのは、私たちを救うために苦
しみをもものともせず担ってくださる、決然とした力強く愛に満ちた先生のお姿で
す。私たちはそのお姿を見つめて礼拝し、地面に額をこすりつけて感謝しながら、この
師に従って行くべきではないでしょうか。

25 節に「弟子は師のように、しもべは主人のようになれば十分です。」とあります。師を尊敬している弟子としては、師のようになれば十分です。そうなれたら満足です。それ以上の喜びはありません。ですから使徒の働きに出て来る弟子たちは、議会に捕らえられ、むちで打たれて釈放される時、「御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った」と使徒の働き 5 章 41 節に記されています。普通は考えられないことです。打たれて辱められて喜ぶなんて。しかし弟子は師のようになれば十分。愛する先生と同じ扱いを受ける者とされた！ということに彼らは感謝と誇りを覚えていた。25 節後半：「家の主人がベルゼブルと呼ばれるくらいなら、ましてその家の者たちは、どれほどひどい呼び方をされるでしょうか。」ベルゼブルとは悪霊のかしらのことです。これは当時の社会において、イエス様に対して考え得る最もひどい中傷です。もし家長がそう呼ばれるなら、その家族はもっとひどく呼ばれてもおかしくない。もっとぞんざいに扱われてもおかしくない。しかしそこに素晴らしい証明があります。もしイエス様と同じようにこの世から迫害されているなら、そのことはあなたが確かにイエス様と同じ家族、神の家族、天の家族に属している証明になる。果たして私たちにこのイエス様と同じ家族に属するしるしは見られるでしょうか。

「弟子は師のように」というイエス様のお言葉を切り取って今日は説教題とさせていただきます。ご自分は何一つ悪いことをしていないのに、私たちの救いのために不当な扱いも黙って耐え忍んで受けて行かれた私たちの先生。ご自分の権利を主張せず、名誉も地位もかなぐり捨てて、すべての苦しみを引き受け、ご自身の命までもささげてくださいる私たちの先生。この私たちの先生のお姿を心から感謝して見つめ、尊敬して、その後に従う弟子として歩ませていただきたいと思います。ローマ人への手紙 8 章 17 節：「私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」イエス様が苦しみを通って栄光に入られたように、私たちも栄光に入りたければ、まずイエス様と一緒に苦しみの道を進まなければならない。苦しみをパスして栄光だけにあずかることはできない。イエス様と一緒に苦しみの道を歩いて行く先に、やがての栄光があります。弟子は師のようになることこそ喜びであり、望みです。イエス様に従ってイエス様に似る者とされ、苦しみを受けてもかえって光榮なしるしとして感謝しつつ、イエス様とともに神の国の拡がりや完成のために仕え、用いられる歩みへ進みたいと思います。